

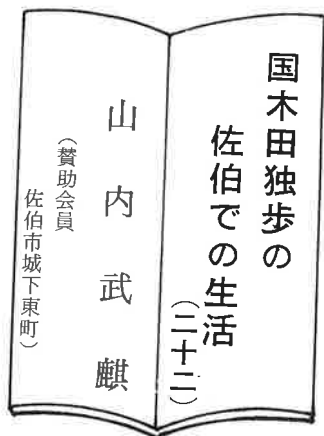
蕭々連日之雨待ちし桜花もうつろひにけり。諸々の草木悉く新芽を發し今ぞ春の絶頂とや云はん。

と、たけなわの春を描写している。

人が實際住む世界に二つある。その一つは俗人普通の世界。即ちたゞ今日よ明日よと暮して老の迫まりつゝあるのも知らない。この天地で無感覚に生活し、悲しみ、喜び、恋をし、争うて、悠々の自然界に没し去つてしまふ。この世界には時間と云う無窮で不思議なものはなく高尚な主観もない。

その他の一つは則ち詩人や宗教家の世界である。美妙
神・永生・希望・善徳・信仰の世界である。

この二つの世界は何処にもある。一人でこの二つの世界の相方に



跨っているものもある。この時彼は苦悶するときである。前の世界に住む人間は気楽である。しかし煩惱の苦悶からまぬがれない。罪の汚れからまぬがれない。このように評するのは後の世界に住む人の口からするものである。

自分は美妙を云う。よくよく考えてみると、人が知らず知らずのうちに美妙の力に感化されるのは勿論のことであるが、彼が美妙を信じ、美妙を外にしては命がないと認めさせるのは容易なことではない。

彼の詩人たちが美妙を云うのは、この天地の間に又人間の小天地のうちに、どうして自分を休め、満足させ、自分を信じさせるのとあこがれ求めたのである。

詩人はこの順序をふんでいるのである。彼が美妙を云うわけである。

然らば即ち最高の美とは、美其の者によりて人をして美其のものを信ぜしむるに至るものを言ふ。

之れファウストのファウストたる所以乎。則ちこれは想の最高なるものを以て美を鼓吹すれば也。

と、美妙について記してある。

十三日

昨夜「夕暮」を改作して終った。今夜は教会に出席した。

夕暮散歩に出る。連日の雨がはれて新月の光がひとしおあざやかで、星の光も殊に美しい。岡の谷から城山の後に出て若宮八幡社内を通り過ぎて杉の月を賞し、それからすぐに教会堂に出席した。

そして次にまた美妙について論じてある。

美妙は自由なり。

美妙を感じずして只だ理想と言ひ信仰と言ふも遂に牢獄の裡に座するに至るをまぬかれ難し。美妙感は自由なり。美妙感是人をして小打算を忘れしむ。小打算は不自由の極なり。

月と星と蒼空と、是れ夜の天の美に非ずや。其の悠悠無窮の光彩は実到人をして又た無限の感想に入らしむ。

嗚呼天地それ此の如く美なり。自由なり。神聖なりと、天地自然の美を称賛し、

人は生れてこの自然の中にある。それに自分から強いて狭い醜き世界を作つて苦しむとは不思議である。

それを救うものは実に人の救主である。真に人の魂を愛するものである。

試みに自分を月のない、草木のない、光りのない、言うならば自然のない場処に立たしめたと仮定してみよ。試みに自分を、人のいない、死の蔭に住ましてみよ。どんな感じるであろう。こゝではじめて月と草木と屋と人間と大空と地球との実世界の人となつて始めて真実に生命を感じるのである。その時またはじめて「美妙」を感じ得るのである。

十四日

水谷真熊氏から来信。

あゝこの水谷という人、この人は今心を苦しめている。彼は前途を望みつゝ苦しんでいる。彼は二十五歳、彼の生涯は己に殆んど半ばを経過した。彼はその一生のことを考えつつあるのである。

あゝこの人、これを一個の人として天地の間に見出しその特性、感情、思想、境遇、家庭との関係、その時代を考へてくると、これは実に地上の人間界に於ける悲劇ではあるまいか。

気の毒なのはこの人のような人である。

自分はこの人の親友である。不思議なのは人と人との関係である。

と、親友水谷真熊君の身の上に深く同情し、次に彼を慰める詩を記してある。

父母愛すべし。

兄弟愛すべし。

朋友愛すべし。

少妻愛すべし。

而して凡ての人間のソール愛すべき哉。

天地の悠々に対しては

哀々の情に堪へず。

月は美なり。

星は美なり。

春色美なり。

実に乾坤の美妙を感じず。

以て生くべく以て死すべし。

永遠の希望を信ず。

一日も千年、千年も一日。

又吾に齷齪クダマの念なし。

立て剛毅以て、

尽さねばならぬ。天職に当る。

又何の惑あらん。

来るべき年は来らん。

逝く可き日月は逝かん。

而して吾実に茲に存在す。

生命は現実なり。

上帝は頭上に在します。

光と栄と愛は彼に在り

そして

右は水谷氏に送りたるものなり。勿論手紙に向て即作したるものなり。されど吾が目下の感は此なり。

と、記してある。

十六日

十五日のことを記して置く

昨日は日曜日。教会に出席する。また昨日は佐伯町の五所明神の祭礼で行列があった。義太夫もあった。夕方富永君と収二とを連れて岡の谷の幽谷に月光をさぐった。溪流に耳をそばだて、聞いた。実にこれは自然の声であ

る。

夜は又た教会に出席した。今日は朝も夜も感話した。

教会から帰り道で義太夫を聞いた。

余談であるが、この五所明神社の春の祭典について筆者の思い出を記そう。

この祭典は以前はこの記にあるように四月十五日から十七日までの三日間行われるのが恒例で、この祭りを普通「お浜出^{はまい}で」と呼んでいた。今は四日から六日まで市の商工祭の一行事として行われている。

お旅所は文化会館が建設されるまでは三の丸の旧御殿を使っていたが、その以前は大手前に仮小屋を建て、お旅所としていた。

このお浜出でに町内で行列のお供につく者は、各家の主人、青年男子、男の子で、男に限られていた。お供につく人のある家々では朝早くから御馳走を作って重箱に詰め、家の主婦や嫁たちがそれを持って一しょにお宮に詣で、社殿の広場のあちこちに陣どって重箱を開いて昼食をとって午後の出発を待つ。お供には町内毎に大太鼓締め太鼓、笛吹きが先頭してその後にお供の人が列を作って従う。これを指揮する世話役は拍子木を持っていた。

行列の先頭には先達の神官が威儀を正して馬に乗り、その後を長槍・長旗・弓持ちと続く。行列の紅一点である可愛い女の子の御子につづいて男の子の御子が行く。

その後を鼻高面をかむり長い鉾をつきながら猿田彦がのっしのっしと行く。太鼓と笛の音につれて踊り舞う獅子舞が通り、大きな賽銭箱さいせんばこの後に、多勢の若者達に担がれた御神輿が静々と来る。すぐその後に神主の橋佐古さんが端正な容姿で馬に跨って行く。後には町長を初め町の有志の人々が列を作って続いていた。町の両側に集まってこの行列を待つ人々や祭り見物に来た田舎や浦まえの人達が、賽銭箱を目がけてお賽銭を投げこみ、拍手打って御神輿を拝む。

そしてこの後に各町内毎のお供の長い行列が続くのである。臼坪・中村・内町・船頭町の順に。その先頭には各町内の印を表わす額を高い棒に備えつけ、三四人の屈強な人たちに担がれて行く。現在もこの額は昔のまゝに使われている。中でも船頭町の狂々の額は見事なものがある。

一番目は臼坪の杖踊りの列である。定紋入りの胸当てにたすき掛けの装束で草鞋脚絆に身を固め、頭には長い

毛のついた冠りものをかむり、両端に房のついた長い棒を小脇に持って青年から少年へと二列に並んで笛と太鼓の音色に合せて歩調高く練って歩く。

次は中村・内町・船頭町とつゞく。お供の人はみな紋附羽織に袴の正装で子供から大人へと列が続く。各組の先頭に行く笛と太鼓のなつかしい音色に合せて静々と進んで行く。行列の指揮をする世話役はみな袴に高袴という出で立ちであった。

行列は臼坪のお宮から中村へと通ずる通称どいと呼んでいた松並木の並んだ土堤沿いの道を通って中村に出て内町の仲町通へ入り、大手前から西谷へと進み、西丁に折れて船頭町の本町に出て、新屋敷を通って広小路に出てから、お旅所のある大手前で終っていた。

行列の通る町筋は残らず家業を休み門口には幔幕を張りめぐらして祝意を表していた。

お旅所に御神輿が着くと、町の人々は続々と詣で、晩には夜神楽が奉納されて賑わっていた。お旅所の周りには天幕張りの売店が軒をつらね、あめ屋・おもちゃ屋などが声張り上げて客を呼んでいた。また、のぞきの掛小屋で節面白く答をたゝきながら歌って客を呼んでいた。

仮舞台も建てられ、素人芝居や義太夫などが催されていた。

御幸祭は十五日。十六日には逗留して、十七日の午後には還幸祭がとり行われ、御幸祭と同じ行列で、反対の道筋でお宮にお還りになっていた。

次に

「自然」若しくは「宇宙」に対しては、吾十三日の夜より更に真実なる感想に入りたり。是れ実にうれしき事実ならずや
と、記して自然と宇宙とについて書いてある。

「自然」！人間が生滅する場所であるこの自然。驚きと敬虔の念は押えようとしてもおさえることは出来ない。

よって自分はゲーテのファウストとウイルヘルムマイステルを研究しようとする念が起った。

よろこばしいことはこの自然に対して常にシンセリテイ（真実）なることである。自分も今は時々真実となる。常に真実ではない。カーライルが云ったように常に真実なのは誰だろうと。しかし常に真実でないことが確かだ

あれば、この人の性を失望する。だからこれを決して信じない。一步また一步進んで、終には真境に達しよう。

一つの真から一つの真と進んで全真に達することが出来るよう。

「世」とはあやしいものである。この「世」とは何か自分は自然を見る。人類を見る。人類相互の関係を社会ということを知っている。その他は見ることは出来ない。「世」とは何か。これは空文字である。わが国で用いられるこの文字ほど愛味な観念をあらわす文字はない。

「世」とは社会のことか。自然のことか。

人間の外にはこの大自然という制力があり、法則がある。このうちに人間という吾がある。人類という吾がある。自然とは何か。人類とは何か。その二つの関係はどうか。

人間とは、人類とは、吾とは「情」である。美妙を感じる情である。

自然と宇宙とは、調和し永遠であり、神聖である。則ち美妙である。自然と人間との関係は宇宙の完全円満の情と人間の情との関係である。

神よ。と人間が呼ぶのはこの情の主に向って呼ぶ人間

の自然に必要な情である。

「詩」とは此の情と情との交通なり。宗教とは此情と情との交通の一層深きものなり。美術も亦た情と情との交通感応なり。

此の情の交通を離れたるものは常に罪と汚れとに染まれり。

と、自然宇宙と人間について色々と感想している。

この十五日の富永日記を見ると、午後二時頃富永が独歩を訪ねた時、独歩の話はとても烈しかった。佐伯の青年の曲った根性を口汚たなく罵り、将来鶴谷学館はどうなることかと嘆いた。そして土地の有志者は自分を辞めさせて帰らしようと、そのため学館を閉校すると云っている。と話した。富永はそんなことはないと言ったが先日の中島教師の言ったことなどから察すると、先輩たちは独歩をもて余してこうするより外にないと考えているのではあるまいかと思つた。もしそうなら戦うのみである。国木田教師に何の罪があるのか。反抗する生徒が何か。先輩が何か。自分はあくまで戦う。と富永は決意している。

それから記にあるように岡の谷を散歩し、教会に出席し、帰りに祭りの夜の雑踏を見た。

と、あり、この晩の教会の感話で富永の話に対して独歩が反駁したと記してある。

十七日

あゝ自然 自分は自然と呼ぶとき胸に火災のうづまきの起るよう感じる。

凡ての人間を吞吐している自然、無限無極の自然、吾は自然のうちにある。生きて自然のうちにある。死んでもまた自然のうちにある。生死は自然が支配する不思議な法則である。

月を仰ぐ時に於て、溪流に耳を傾くる時に於て、直ちに無限の蒼空を 視する時に於て、静かに野花を眺め入る時に於て、吾実には爾の声を聴き、爾の呼吸に接し、爾の生命を感じず。嗚呼爾は生く。

と、自然に呼びかけて、人はどうか。

あゝ自然よ、自然と人との幽玄な関係について語ってくれ。

と、自然を心ゆくまで嘆美している。

十八日の記には

眼を開て視て、眼を開て想像し、眼を開て沈視せよ。自然は実在なり。爾の空想にあらず。詩人の言葉に非ず。爾を載せ爾をつゝむ処の実物なり。

と、自然の実在を確認して、

シェクスピアを埋め、ミルトンを埋め、クロンウェルを埋め、ウォーズワース・カーライルを埋め、テニソンを埋め、ゲーテを埋めた自然である。あゝこの自然。自然から離れて人間を考えることは出来ない。人間を忘れて自然を思うては出来ない。自分は人間であるからである。人間は自然のうちに生滅するからである。

あゝこの宇宙。これは何か。人間よ、人間の生命生活の意味は何か。

美妙にして幽玄無窮なる哉自然

見よ見よ。人間の生活は更らに不思議なる哉。人々は只だ生活す。生活するが故に生活す。そこに何の意味ありや。

吾羅馬人の生活を思ひ、桑園に唱歌する乙女等を思

ひ而して天地の悠々を思ふ。哀思禁ず可からざるものあり。

自然よ。遠からずして吾も爾の懐に帰らん。爾の無窮の懐に還らん。

と、自然を讚美し、自然と人間との關係を考えている。独歩は自然讚美者である。自然に接し心より愛し、そのふところに溶け込んで行きたいと願っている。

次に

昨夕も今宵も、月光を踏み、星彩を仰ぎて城山の麓を回ぐりぬ。山谷の月光。溪流の幽声。老杉黒影の壯嚴、露を帯び光を受けて微風にきらめく笹、古びた神社の寂寥幽邃、言ひ難き草木の香、心地よき微冷微温の氣候、杉などの黒々と茂れる枝のすきまよりもれ落る光のものがさ。凡て美ならぬはあらず。

と、詩を読むような美文調で城山廻りを描写している。そして心から自然の美を嘆賞している。独歩はこの城山廻りが気に入ったのか度々廻っている。

今夜は祈禱会、祈った。

神よ吾が感情・直覚へ眼を被ふ処の布を取り去り給へ。

と、これが自分の願いだである。

あゝこの自然は不思議である。人間も不思議である。

人類も生活も不思議である。凡ての關係は不思議である。しかし自分はまだ深く直接にこの秘密の感に打たれることが出来ない。自然を指して母よと叫び、その無限無窮、美妙のふところに常に坐することが出来たらどんなに嬉しいことであろう。

と、自然に心から思慕している。

次に

悲劇というのが何を悲劇と云うのか。ハムレットは悲劇か。悲劇とは英雄的な思想感情をいだけ主人公の身の上のみか。いや違う。

見よ。かの無学で無智で、只だ生きる故に生き、「吾」と自然とについて何も考えない人間をこの悠々とした天地の間に見出した時は一層悲劇ではないか。

と、真の悲劇を説明している。

次に

吾は人情を信ず。人情は永生を信ずる事を命ず。故に吾は永生を信ず。人情は同時に神情なり。天地情なり。凡て生命の粹なり。

人情の尤も其の本然に動くは美妙に感じたる時なり
美妙！ 故に吾爾の宗教を信ず。

と、人情について記し、特に人情の本当の姿であらわす
ときは美妙を感じたときであると美妙感が最上の情であ
ると説いてある。

田村三治君に手紙を出す。市山の正、タキ、ゆう子た
ちと一しょに写った写真が来た。

田村三治に出した手紙は、

春が過ぎ夏の候となったが例の脚気はどうかと見舞を
述べて、佐伯の教会のことを報らせてある。

当地の教会は八九名の青年一週に四回会合致し兎も
角活気あり熱心あり小生これ丈が楽みに候 今夜は水
曜日ゆへ八時半より祈禱会これある筈に候 小生は毎
時感話致す様努め居候 植村君の噂は毎度話柄に上り
候 其度毎に諸氏来遊を望む事甚だ切なれども、小生
は只だとても出来ぬ話ならんとなだめ居候

(中 略)

当地も四五日前より好天気相続きめつきり暑く相成
り候 後の山にて蟬声を聞くに至り候 海水浴の時節

は近けり！ 今夏はこれが楽みにて目下指をりかぞへ
て夏八月の到るを相待ち居候 夏は帰国致す積りなり
多分此秋は再会致し居る事と存じ候

(以下 略)

田村は熱心なクリスチャンであったので、佐伯の教会
の様子を報らせて喜んでもらいたいと思ったのであろう。
独歩は教会に出席する度に自分の考えていることを感話
することを楽しみにしていた。教会員にはその話に感激
し、益々独歩を敬愛していたのである。

十九日の記

風の樹梢を渉るを見よ。動きそよく事生けるが如し
嗚呼生けるが如し。月のよなよな巖かに天空を横ぎる
を見よ。嗚呼乾坤は活動す。変化す。運転す。知らず
これ何ものぞ。その心如何。

と、森羅万象の活動と変化とに感動し、自然の動きに驚
異している。

小説・ドラマ・詩歌、自分がすべきことははっきりし

ているが、何を書くべきであるか。

と、問うて、

宇宙に於て人生に於て尤も厳肅なる事実を書かんと欲す。嗚呼然り尤も厳肅の事実は最も厳肅なる心へのみ映じ来る。

嗚呼厳肅なる心よ。吾爾の前に強き魂を感ず。

と、自分の創作活動に対する心構えをはっきり示している。

次に

見よ、十四日の春月は朦朧とわが小さい町の上を照らしつゝある。あゝこの月光、そしてこの月光に照らされている世界、何んと不思議な対照をしていることよ。

厳肅な心でこの月光の下この世を見よ。その生活を見よ。事実を見よ。乙女は照らされている。恋は照らされつゝある。貧家は照らされている。恨みは照らされている。暴飲も淫楽も照らされている。そして中の谷には墳墓の上に月の光が冷やかにたゞずんでゐる。のを見よと、朦朧とした春の月光に照らされた世の現実の姿を描いて、清い月光との対照の不思議さを記してある。

そして次のような月光の詩を詠んでゐる。

嗚呼月光よ。爾は今ま静かに寂かに此下界を照らすよ。

嗚呼爾に千年万年の色あり。

爾の明らかなる眼に億万無数の人間映じたり。

生滅する此下界、爾の見る処の如し。

而して吾今茲に在り。

吾ば靈魂は今ま俯仰して茲に立つ。

嗚呼美にして幽玄の月の光よ。

爾の心は何を思ひつゝあるか。

爾の心は何を指しつゝあるか。

爾の心は何を望みつゝあるか。

嗚呼此の餒へたる吾が魂に教へよ。

ヲ、寂寞の天地よ。吾茲に在り。

白雲生けるか如く空明を横ぎる。

遠星生けるが如く幽穹に光る。

而して吾実に生きて茲に在り。

何処より来るか。何処にゆくべきにや。

ヲ、無窮無限の天地よ。

オ、長生の月光よ。美妙の色よ。

爾等は吾に無頓着なるか如し。

されど吾遂に爾等の自然のうちのものなり。

嗚呼、嗚呼、嗚呼、吾言葉を知らず。

吾は只だ無窮の天と美妙の月と吾が情とを感ず。

と、月光をたゝえている。

次に「吾」について詠んでいる。

嗚呼所々に住む吾ならぬ他の「吾」達よ。

御身等に今ま何をなしつゝあるか。

何を思ひ、何を感じつゝあるか。

御身が思ひ、御身が感ずる処を凡て吾に教へよ。

御身等は他の「吾」なり

御身等は吾なり

吾は吾の事を知らんことを希ふ

吾が心を知らんことを思ふ。此吾は小我のみ。

と、他の人々に同情の眼で呼びかけている。

二十日の記に

昨夜以上を記し了はりて十時、則ち月光を踏みて散歩す。老梟の老松になくあり。山河寂寥として月光に包まる。

と、ある。老松は馬場の松であろう。

次に

人物を考える時は、その人の老成人の頃のみを想像してはならない。その人の子供の時から青年になり、青年から壮年に、更に壮年から老成に達して遂にこの幽遠な自然に帰し去ったその変化発達の模様やその事実について考えるべきである。

と、書いて、次に詩を次々と記してある。

嗚呼此の地球よ、地球よ 爾、地球よ。

幽遠無窮の空明よりすれば爾は小なり。

されど爾はたしかに人間の住家なり。人間の発生所なり。

而して埋葬所なり。

人間は爾の支配する処なり。

嗚呼地球よ、爾の秘密を語れ。

而して人間生命の秘密を知らん。

草・木・花・流れ・海！

嗚呼地球よ、爾の無限の働力よ。

と、地球に語りかけた詩である。

嗚呼天の光よ。

此の地上を照らす天の光よ。

美なる月よ。美なる日よ。

美なる星よ。嗚呼天の光よ。

此の人間の世界を照らす光よ。

森のかげにおち、谷の水に落ち

草の露に落つる天の光よ。

嗚呼此の無限無窮の自然の光よ。

吾が心の泉に、情の情の流れに、

魂の魂の露の上に落ち来る天の光よ。

あゝ美なる哉、幽なる哉、聖なる哉光よ。

天の光！

と、地球を照らす月・日・星を詠んでいる。

嗚呼此の地球よ。爾の力は何処より来るぞ。

大なる力よ、はてしなき運動よ、

限りなき変化よ。

爾は生けるものか、死せるものか。

心あるものか、情なきものか、

智あるものか、あわれみあるものか。

嗚呼深く大なる自然よ。

嗚呼地よ。吾等人間の住家なる地よ。

爾如何にして吾等を生み、亦葬るぞ。

爾は塵土なるか、爾は死の魂なるか。

然らば吾等の此生命は何処より来りしか。

アゝ大なる、聖なる、奇なる、自然よ。

と、地球の偉大な力を称えている。

次に春を謳歌している。

嗚呼春！

春よ、春よ。

命の栄よ。

美しき春よ。

はてしなき世界の何処より爾は来るぞ。

爾の力は何の力ぞ、

あゝ人の愛、人の希望、人の精力、

皆爾の賜なり。

嗚呼春よ。美しき春よ。

次に人の魂を詠んでいる。

人間の魂、受くる命運は奇なる哉、

魂何処より来り何処にゆくぞ。

焦がれて望む処は空なるか

そもそも何の故に望みは人の命なるか。

この頃独歩の身边に変化が起りつゝあった。二十日の富永日記を見ると、午後独歩を訪ねて四時まで話している。独歩は何時ものように少年の風紀のみだれについて嘆いた。それで富永は自分は学館の現状を黙って見てられないから運動を起そうと考えていると独歩に話した。独歩は去った。自分は今二つの道を考えている。辞めて東京へ行くか、こゝに留まって職務をつゞけるかである。もし学館を夏までで閉校するから辞めて呉れと云うのなら辞めて此処から去る。若し留まるなら運動を起さねばならない。と。

独歩排斥の策動はいよいよ本格化しつゝあった。独歩はその去就についての苦しみを富永と話し合ったのである。

二十一日の記は全部詩である。

空想！ 夢想！ 妄想！

とは言へ！ 人間必然なる情なる哉

希望！ 哲人の心か。

空、夢、妄の想！ 痴人の情か！

希望は無窮の「今」に生き、

空想は忽ち過ぎ逝く「時」の夢に呼吸す。

嗚呼空想よ去れ！ 爾、悪魔の使よ。

見よ、世界を、見よ自然を！

確乎にして窮りなき、命に生く。

自然は真面目なり

自然は空想を有せず。

されど人は空想にあこがる。

去れよ、空想。来れ真面目の世界。

真のよろこびよ。真の望よ。

人間は空想によるにあらざれば生くる能はず。

ア、人間は前途の夢を結ばざる限り生くる能はず。

果して然るか、果して然るか。

ア、希望！ 希望！

希望の希望は何ぞや。

(この項続く)